

# LGB／T当事者の語りから里親家族の喪失をみる —米国調査からみた二重規範と家族の事例—

上野善子

性的マイノリティであるLGB/T当事者<sup>(1)</sup>が家族を形成することは、少なからず困難を抱えている。心と身体の性の不一致からくる身体的機能的な問題に加えて、社会からヘイトクライム<sup>(2)</sup>などの差別や偏見(Gates 2014)とともに自責の念も抱き、支援機関も圧倒的に少ない。

本稿は、米国のLGB/T当事者の家族の形成と困難さについてインタビュー調査を実施し、LGB/T当事者の性と家族の喪失と二重規範の中で、社会的養護における家族がどのような困難を抱え、どのような支援を必要としているか、福祉的課題を明らかにすることにより、その一助としたい。

## 1 米国のLGB/T当事者

Gallup Inc.の調査によると、米国でLGB/Tと認識している人の数は年々増えている。2012年の平均約3.5%から2016年には平均約4.1%と増加している。地域別では西海岸やハワイ諸島の太平洋地域が5.1%と米国の中でも高く、同様に2012年の調査の約4.9%からも増加している。また、中南部でも約2.9%から約3.4%と増加しており、全体的にLGB/Tと認識している人が増えている結果となっている(Gallup 2017)。しかし、本調査結果はLGB/T個人が増えたと見做すよりは、むしろ社会的受け入れの増加があった結果であり<sup>(3)</sup>、政治やカミングアウトしやすい社会背景に影響された結果とも言えよう。

さらにwell-being に関する調査によるとLGB/T当事者の女性は、特に身体的健康や経済的安定、目的意識や社会生活について様々な課題を経験しており、福祉格差を生じていると指摘している(Gallup-Healthways Well-Being Index survey 2014)<sup>(4)</sup>。

里親や養子など子どもの養育について、2009年の国勢調査局のデータによれば、全米で未婚の異性カップルは推定6万4,000人以上の養子を出しているが、同性カップルの約2万人は約3万人の子どもの養育していると報告している(U.S. Census Bureau 2009)。

本稿では、社会的養護の家族はどのような困難を抱え、どのような支援を必要としているかを明らかにするため、調査を実施した。

## 2 調査・分析方法

### 2.1 調査期間と手法

調査は、2015年7月29日(水)～8月11日(火)までの12泊14日間と、2016年8月9日(火)～8月17日(水)(9日間)の2年間で実施した(現地時間)。フィールドワークの手法とフィールド・ノーツを用いた参与観察と、スノウボウル・サンプリングによるインデプス・インタビューによる調査を期間中21名に実施した。

### 2.2 倫理的配慮

本研究の全体的な倫理的配慮については、へ

ルシンキ宣言に基づき十分な倫理的配慮を行い、研究計画全体については日本社会福祉士の倫理綱領に従って実施した。

研究開始前は研究協力者やスーパーバイザー等と倫理的配慮についての確認・協議を複数回行った後、調査研究を実施した。インタビュー調査の際は調査対象者の当事者や支援グループ等に対して、機関については研究計画書や同意書を作成して口答および書面にて説明し、同意を得た後に署名を得た。

米国でのフィールドワークおよびインタビュー調査、参与観察等に関しては、文書による説明は英語で実施し、口答による説明は英語と日本語の両方で研究内容を確認し、さらに通訳も通して同意を得られたもののみを取り扱った。特に英語によるインタビュー等はネイティブの通訳者が調査に同行し、内容に齟や誤りがないか、前後、途中に確認しながら実施した。英語による倫理文書等については、あらかじめ日本国内でネイティブ・スピーカー、またはスーパーバイザーによるチェックを実施した上で調査を実施した。計画書等は海外調査であるため、母国語(英語)に翻訳し、スーパーバイザーによるダブルチェックを経た上で倫理文書を提出し、英語を母語とする通訳者を介して説明を行い、作成した書類を用いて署名による同意を得た。心理的影響をおよぼす可能性のある対象者は調査前より対象者から除き、万が一、調査によって影響が出た場合は自主的な受療を依頼した。(紹介者へ調査終了に連絡をとり、確認しているが調査による影響はなかった。)

### 2.3 インタビュー調査で大切にしたこと

質的調査においては倫理的配慮が重要なことは当然である。本研究においても、調査目的やインタビューが不利益を被らないよう、いつでも調査を打ち切ることができることや、回答

したくない応えについては断れることなどを、英語(母国語)による文書と口頭で十分に説明した。調査開始前に、同意書へのサインをもって、インタビュー調査を開始することとした。当然ながら、インタビューはインタビューイの使用原語である英語で行われるため、調査目的と使用方法に齟齬が生じないよう倫理的な調査と同意については、特別の配慮を行った上で調査を実施した。通訳者は、本研究代表者に加えて、ネイティブまたは英語を母語として日常的に使用しており、かつ日本語に堪能な日系2~3世の方で適宜日本語が使える2名の通訳者を介して、調査目的や使用方法、倫理的配慮について、十分説明と確認をして実施した。

本研究のインタビュー調査で最も重要視した点は、インタビューイが最も安心できる環境の中で行うことであった。従って、調査した場所は自宅や公園、喫茶店の屋内や屋外のテラス、レストランや車内などで、インタビューイ以外に、近くに家族や親友などの他者がいるかどうかを確認し、最も安心できる場所や空間でインタビューを実施した。

また、インタビューでの誘導を避けるため、インタビューイの会話に任せる非構造化インタビューにより実施した<sup>(5)</sup>。Spradley(2016)は、質的調査はテキストを説明するよりも理解することを目的としているとしており、本研究でも信用を得ることとラポールの形成について、最も配慮を行った上で実施した。

### 2.4 質的データの取り扱いと分析手法

本調査研究に有効な回答者数は6名であった。インタビューは英語による聞き取り調査を実施し、会話をICレコーダー2台<sup>(6)</sup>で記録した。音声データは英語による逐語録を作成して、回答者の表情やインタビューの様子についてはフィールドノーツを作成し、分析に用いた。

表1 ケースの概要

ケース	年齢	M/F	人種	仕事	肩書	LGBT	社会的養護と人数		その他
A	57	M	白人	SW (児童)	Director	G	里親・養子5 (白人・黒人など)	多数	現在は一人で、6か月、8歳から26歳までの養子と里子を育てている。州の里親プログラムを委託される。
B	-	F	日系 3世	SW (高齢)	Director	-	養子(中国)	女2	50代?
C	-	F	日系 2世	教員	大学教授	L	養子(黒人)	男2	50代?
D	-	F	白人	NPO	Director	L	養子待ち	-	40代
E	-	F	中国系	会社員	—	L/T	里子・養子待ち	—	30代、白人女性のパートナー有。養親は白人女性。
F	20	M	白人	大学生	学生	G	里子・養子希望	—	ボーイフレンド有。将来的に養子縁組で子どもを希望。

※ — は回答なし

会話の逐語録はNVivo9(英語版)を使用して、ケースのノードを分類して分析に用いた。

## 2.5 データの結果と概要

表1はインタビューの概要である。年齢や性別、人種などは様々である。

回答者は一般的な家庭よりも、職業や社会的地位が高かった。スノウボウル・サンプリング調査であるため、ケースの職業や社会的地位が偏った可能性は全くないとはいえないが、むしろ、社会的養護の人材として、宗教や福祉的な思想・信条によって、社会的養護を選択したという全体的な傾向は充分あると考えられた。また、里親や養子縁組の要件として、裕福で大豪邸に住む家庭である必要は無いが、子どもにとって安全で安心な落ち着いた環境を提供するために、定期的な収入や社会的地位、部屋数などが資格要件として審査されることから比較的社会的地位の高い人への調査となっている。子どもの生命と権利を護る社会的養護の対象者として、基準に満たない家庭環境や福祉教育の受皿としての役割を満たすこと無しに、委託されることはないことから、標準的な家庭以上の

環境が整うことは、ある意味当然と言えば、当然の結果かもしれない<sup>(7)</sup>。

本調査では個人情報保護の観点から、得られた情報の中で、個人情報と推定される内容等については匿名化して調整した。ケースAは里親であるだけではなく児童福祉のスペシャリストである<sup>(8)</sup>。また、14歳未満のMtF<sup>(9)</sup>やLGB/Tの里子の参与観察等も得られているが、倫理上の観点から本研究では対象者から外して、触れることを差し控えた。

## 2.6 キーワードと考察

得られたキーワードは、表2のとおりである。

表2は、13歳から19歳までのティーンエイジャーと里親、実親に関する関連項目である。

子どもが里親制度に保護される前とその後の様子についてのキーワードを抽出し、分類した。

ティーンエイジャーについては、薬物や窃盗行為などによる少年刑務所、ホームレスなど、荒廃した社会生活の様子が語られ、また心理的にも怒りなどの感情コントロールの問題や躁うつなどネガティブなテキストが得られた。実親

表2 キーワード

		Before protected	After protected
teenager	livelihood	homeless / changing location where they live / can't keep / move around with family or alone	learn how to love (for adults) / attached / very therapeutic / love animals
	Social groups	not graduate high school/ lazy children / retard / dropout	driver's license
	State at home	doesn't come out of the room / lying	hate the therapist / refuse to talk / resistant to any help
	delinquency / law-breaking	Stealing / fighting / drug / going prison(turns 18) / juvenile prison / kids out of jail	
	personality/ character	not bright / bright / very(really) angry / anger mentally retard / emotional problem / psychological evaluation / messy	
	social care	alternnate program / high risk program for foster kids / 43% in foster care wanted to come to its house *	
Foster Family	foster parent	aunt / parental grandmother / baby sitter / failed adoption / legal guardianship/ child advocate	foster care / re-unification
	race	no racism / mixed race / melting pot	
	rights	feel less / no rights whatsoever / bio-parents have all the rights / get them away over the edge / good lives	re-unification / research said 'this is the best for children'
	social care		not private investigator / maintain relationship
bio-family/ parent	family relation	domestic violence / mother is a victim; battered woman / against her father (mother)	re-unification / have a lot of rights
	livelihood	homeless / changing location where they live / can't keep / move around	
	delinquency/ law-breaking	stealing / fighting / lying / drug or alcohol addict	
	personality/ character	mother liked bad (black) guys / addiction / codependent / enabling	
	rights	disfunctional family / homeless	parental rights / doesn't want to lose custody

(インタビュー調査より上野作成)

\* 米国社会では基本的に施設養護は存在せず、シェルターや里親による一時保護か代替養育、またはパーマネントシステムとしての養子縁組しか社会的養護の方法がないことは特筆しておべき内容である。

についても同様に、薬物やアルコールなどへの依存や共依存関係、家族間暴力、ホームレスなど、機能不全家族のワードが多く得られた。特に実親については親権に拘っており、親権剥奪を望んでいない。里親は、法的な制度や実親との関係についてのワードが目立ち、原家族の再統合を意識している。

保護の前後では、子どもや実親に対する愛着の問題や権利擁護、社会的自立に向けての支援の必要性などが得られ、子どもは実親から逃げられる行動力と場所の仕組みづくりが必要と考えられた。

また、子どもと里親、実親について、それぞれの立場における心理的な評価や喪失に対する支援が重要と考えた。

### 3 社会的養護における喪失を考える

本研究における語りの分析では、次の3点の結果が得られた。

インタビュー内容は、英語による逐語録を作成し、筆者が日本語へ翻訳して、フィールドノートと合わせた上で意味解釈を行い、分析に使用した。また、会話中の( )内は、会話の意味を理解するため、言葉を補完している。

#### 3.1 里親制度という名の喪失

米国において里親とは、社会的養護の根幹を成す社会制度の担い手のことである。しかし、多くの里親が、社会的養護を制度として受け入れることについて困惑している。これまでの筆者の長年の調査では、彼らの多くは社会制度の担い手である前に、子どもの幸せを願うひとりの人、という人物像が共通の認識であった。

一般的に結婚した夫婦は子どもを持ち、家族をつくることは、自然なことと考えている。したがって、不妊などの理由から子どもが授からない夫婦は、最終的に養子縁組を検討すること

は珍しい選択肢ではない。しかし、様々な理由から養子縁組が叶えられず、最終的に里親という選択肢を勧められる場合がある。しかしすべての里親が実子を持たないわけではなく、妊娠・出産・子育てに困難な理由があったり、あるいは宗教的な理由や社会的使命で里親として名乗り出ている人も多くいる。

様々な理由から里親をしている人たちの共通点は、多くの場合、子どもとの血縁関係がないということである。インタビュー調査では、ハワイ州は米国内の他州と比べ、祖父母や叔父・叔母といった血縁関係者が里親をする傾向が強いといわれる<sup>(10)</sup>。米国内においても通常、親族里親は、一般的な社会的養護における里親とは基準を画している。

因に、里親とは一種のあいまいな喪失状態といえる。A氏のテキストに置き換えれば、里親はresourceに過ぎないと語られるが(図1)、子どもにとっては、実親との関係が第一にあり、実親が「親をする」ことができない時、里親は一時的な親の代替えとして、社会的資源の役割を担っているにすぎないからである。

630 里親は、実親家族との血縁関係はない

631 しかし、里親家族は社会的資源(resource)として一番に使うことができる。何故なら、里親家族は実親家族との関係が続けることが奨励されているからだ

632 あなたは子どものためなら、里親をベビーシッターとして、(子どものために)良きもの(positive)として活用することができる

633 私がいつも親に言っていることは、私はあなたと(子どもの)父親を交代しているわけではないですよ、

634 私は、あなたの愛する子どものために、もう1人の親を加えているだけですよ、

636 私は(子どもたちの)親の代わりになることはできないけれど、時々、実親が親をすることができない時があるから、私がやらなければならない、と

図1 社会的資源の里親(A氏の語り)

A氏は、法や制度で子どもや家族を縛ることの難しさに加え、自らも、そして子どもたちの喪失と向き合い、戸惑いながらも、子どもたちの幸せのため、と葛藤しながら里親を「する」様子が語られている(図2)。

637 けれども、法律で縛ってみても、彼らとの関係を継続することは難しい

640 子どもたちは、実親家庭に戻るとすぐに、里親との関係を絶ってしまう

641 そして、子どもたちは決して再び里親に会おうとしない

642 里親にとって、それはもう1つの子どもの喪失なのです

643 (子どもがそういう行動をとる)理由を忘れないで下さい、子どもたちは喪失と折り合いをつけ続けているのですから

644 そう、それ(里親制度)は(子どもにとって)喪失を増やしていることにもなるので、子どもたちにとって健康的なことではない

645 でも私たちは、里親制度を変えるためのメカニズムや法律を持っていない。なぜなら、実親にはまだ多くの権利があるから

646 少なからず、ハワイでは

647 知人の里親たちは - 私にはそういう話をする友達がいるが - 私たちはとても軽く見られているよね、って

648 不当に扱われているように感じるよ

649 私たちには全く権利がないねって感じる。

だって実親は、私たちがどうやっても持てない権利、すべての権利を持っているからね

650 だから、これはこれで問題で、「もう里親を続けるのなんか嫌だ」という家族が出てくる

651 私だってね、こんなことは二度と体験したくないよ

図2 里親の喪失(A氏の語り)

里親たちは、血のつながりの無い家族という世界の社会的認識との差異を否定し、「血が繋がっているだけが家族じゃない」とあえて口にして、里親としてのアイデンティティを確立しなければならない(図3)。

652 彼ら(実親)は私が善意でやっていることや、私は子どもたちを連れ去るわけではないことを知っているからhhh(.)

651 私は、ただ彼らに手を貸そうとしているだけということ

652 私はそれが重要だと思う(.)  
(中略)

625 例えば里親は、子どもが実親のところに戻る時、里子との別れからくる喪失感のために、(悲嘆による)困難な時間を過ごしている

626 彼ら(多くの知り合いの里親たち)は、それに苦悩している

629 子どもたちが(再統合されて、実親家族の元へ)戻った途端、我々里親はどうすることもできない(実親家族と再統合されて以降の関係性を持つことや、それを制御する術はない)

図3 里親の苦悩(A氏の語り)

656 我々の大きい努力は家族と一緒に子

どもたちを再統合することである、そして私はこれらの頭がおかしい麻薬中毒者やアルコール中毒の卑劣な人々と一緒に、子どもが戻されるケースを見た、あるいは、相対的な配置のため、このようなひと押しがあるから、親族の元に子どもを預けた。

657 彼ら(保護機関の職員)は同じ機能不全に陥った家族と一緒に子どもたちを預けたのだ。

658 家族再統合は、(米国では)ハワイ州が最も高いと思う。

659 ハワイは他のいかなる州より高い統合の割合を持っている。

661 私はそれ(再統合)が子どもたちのために常に最も良いことであると思わない。私は時々、あなた(研究者)が子どもたちを逃がさなければならぬと思う。しかし、彼らの研究は数年前「これ(再統合)は子どもたちのために最も良い」と言った。

662 つまり、たいていの研究者は、若干名の家族員のことを言う、しかし、それは里親でも同じことであり、里親家族(の行動)次第だ。

663 里親には多くの良くない養育もある。それには幾つかの問題があるが、彼らを里親として認可する時の方法とその研修内容に問題がある。また、その里親を養育家族として支えていく方法があるように思う

664 もしすべての子どもたちが、私の家にいたならば、みんな絶対家になんか戻りたくないと思うと思うから。

図4 里親のこどもへの思い(A氏の語り)

### 3.2 LGB/T当事者のあいまいな喪失と悲嘆

喪失(loss)とは愛情や大事なものを失うことであり、悲嘆という絶望的な哀しみを伴う。愛情が強ければ強い程、喪失に対する衝撃が大

きいと言われる。また、喪失の問題は悲嘆だけではなく、身体的社会的に反応を起こし(悲嘆反応)、周囲に様々な影響を与える。例えば、事故や災害などで愛する家族を失った場合や、ペットを亡くした場合のペットロスなど、感情的な哀しみに陥り、体調を崩したり、思考がネガティブになり、学校や会社に行けなくなるなどの反応が現れるなど、様々な影響を伴う。

またBoss.P(1999)は、例えば、行方不明や離婚、認知症の家族など、喪失の状態が曖昧で、不確実な状況を「あいまいな喪失」と呼び、「はっきりしないまま残り、解決することも、決着を見ることも不可能な喪失体験」と定義している。あいまいな喪失には2つの種類があり、心理的には存在するが、身体的に存在しない状況を①「『さよなら』のない別れ」と呼び、行方不明や誘拐などの状況や、より一般的な状況として離婚や養子などを例として挙げている。また、身体的には存在しているが、心理的には存在しない状況を②「別れのない『さよなら』」と称し、抑うつや認知症、自閉症、より一般的な状況としてホームシックやワーカーホリックな人などを例示している。

LGB/T当事者の語りからは、LGB/Tという性の喪失と、社会的養護という場所での家族の喪失という二重規範がある(図4)。

LGB/Tの親の中には、身体的理由から実子が望めない場合があり、子どもの養子縁組を希望する人もある。しかし、養子縁組がかなわず、社会的養護として里親をする場合もあり、家族再統合により子どもを喪失する体験をしている。里親自身は社会的養護の役割をしっかりと理解している上で子どもを養育しているが、子どもを喪失するダメージは大きい。

### 3.3 社会的養護の二重規範

LGB/T当事者への調査では、インタビュー

を通じてシintaiとセクシュアリティに関連する内容が繰り返し登場する。里親家庭へのインタビューをした場合、子どもにセクシュアリティに関する問題がある場合を除き、セクシュアリティに関する回答は余り出て来ない。これはLGB/T当事者が、セクシュアリティの問題に関する社会的認識について特に意識して回答しているということが言えなくもないが(例えば、LGB/Tへの理解を促すとか、何も問題がない同じ人間であるというような、偏見を排除するようなことを伝えたいなど)、常にLGB/T当事者が、LGB/Tであることは社会からの逸脱ではないという確認作業を行なっているように捉えられた。

本インタビューは質問者からのバイアスを避けるため、回答者には自由に語ってもらえることから、調査者を通じて回答者が訴えたいことが言葉の中に反映しているといえよう。しかし、回答者は自身が多くのLGB/T当事者や子どものLGB/T問題を解決するために、常にLGB/Tは普通と同じである、という説明を繰り返さなければならない(図5, 688)。

LGB/T当事者の社会的養護は、まずは自分たち、または子どもは「普通である」という確認作業をしなければならないという煩わしさが常に付きまとう。更に、このことにより問題の論点を見誤まることについて危惧している。この論点のズレに関しては、社会的認識に対する怒りに変換されたり、毎回の不要な説明を加えることであったりする。当然、問題の本質全てがそこに集約されるわけではないことはいうまでもない。

688 重要なのは、彼らはセクシュアリティがそうだ、というだけのこと。

689 私はいつだって、子どもたちを諦めないし。

690 私はとっても寛大だからね。

691 彼(子ども)らは私から(金品を)盗んだ、と嘘をつく。私はあなたにいくら盗まれたか、言うことができないということを意味している。ただ最近、私はクロゼットから錠剤を紛失し、Xboxも見つからなかった。

692 クスリはね、机の下にあった。一落ちてたんだよ。

693 それはつまり(ある意味)、期待はずれだったということになる。それは何を意味するのだろうか。

694 これは何を意味するのか、ということ。何年前に、(フォスター・チャイルド)が何千何万ドルも盗んだことがある。

695 たいてい、多くの人は、まずそれに我慢できない。

696 でも、私は絶対に子どもたちを諦めない。

697 これはセクシュアリティの問題ではない。

図5 LGB/Tの問題について(A氏語り)

LGB/T当事者の社会的養護の問題は、彼らがセクシュアリティの問題から生じた先入観から開放され、コミュニティに受け入れられる事によって、初めて問題の本質に向き合うことが可能になる。

インタビューは、セクシュアリティの問題と社会的養護の問題は重なることがあっても本質は異なることと同じように、社会的養護の子どもが何かをやらかす、といったようなことも、あくまで我々の期待にすぎない、と指摘している(図5、692,693)。

#### 4 社会的養護というテキストが孕む喪失と希望：まとめにかえて

A氏の語りから、実親と里親の関係について



多くが語られた(表2)。A氏の語りからは、法的な社会制度を整える必要性を訴える意味もあるが、むしろ里親制度を推進する際は、実子ではないこと、「子どもの喪失」を実感として受け止める覚悟や心構えを持つことが必要と指摘している。したがって、筆者は、多くの社会的養護当事者の語りを通じてできる限りパーマネント・ケアとして推進すべきと考える(上野2014)。

#### 4.1 パーマネントというディレンマ

里親たちは実親と自分たちを対比させ、どんなに子どもたちのために努力して、様々な関係を構築したとしても、実親と同等の権利は絶対に得られないことに対して苦しんでいる(表2)。

日本国は、国連の勧告や施設内虐待の問題などを前提に、里親政策を推進しようとしている。里親制度は決して悪い制度ではない。しかし、里親制度とは、本来は子どもの親の喪失を補完する制度であるはずであるが、里親自身、あるいは里子の喪失体験を増やす結果につながる点にも注目しなければならない。社会的養護は、「親ができない」ことに対する補完の制度である。

現状は家族の再統合が根底にある上で、実親を支援し、里親制度を推進することは、実親と子どもの権利、里親の権利を比較した上で、パーマネント(永続的)ケアを考えなければならない。里親制度はあくまでも一時的な代替補完の制度であり、子どもも里親もその覚悟と理解がなければなり立たない。パーマネントの概念を期待し続けることは、子どもも、里親たちも、喪失体験によるディレンマに苦しみ続ける結果になるのではなからうか(上野2017)。

#### おわりに

本調査は、米国ハワイ州の里親へのインタ

ビュー調査という質的手法により数が限られることから、多少の偏った研究結果であることは否めない。また海外での質的研究は翻訳や解釈にも一つひとつ時間がかかることはデメリットである上に、単純に日本と米国を比較することは乱暴過ぎる。地域的、文化的な差異や価値観を十分に考慮した上で、現地の人の暮らしぶりを理解し、継続的な関わりと関係を大切にして、事例を丁寧に読み解くことが、最も重要と考える。

しかし、筆者がこれまでに日本で行った別のインタビュー調査でも、本調査と同様の語りを得ており、単なる偶然の一致と捉えるべきではないと考えている。つまり、文化的・地域的な差異はありつつ考察する必要があるが、人として本質の部分は同じと考えるべきだろう。このような本調査の結果は、日本の子どもの福祉に資する研究という立ち位置でインタビューに回答して下さった方々の善意の上に成り立っている。質的調査の結果を一般化するにはまだ数が少ないが、今後もLGB/T家族のあり方や里親への教育、LGB/T当事者の支援組織作りなどに応用することが可能であろう。

筆者に残された課題は、子ども家庭福祉における現代的な問題の明確化を、継続し続けることである。今後も国内外問わず、その文化的社会的背景を考慮しながら、人の生きざまや有りようとしての当事者の語りから、課題の明確化に取り組み、対策につなげていきたい。

#### 【謝辞】

本研究は、2015(平成27)年度および2016(平成28)年度桜花学園特別研究費補助金の助成を受けた研究の一部である。調査先の米国ハワイ州では、2005年の個人調査から長年に渡りHonolulu Community CollageのIris J. T. Saito教授に、スーパーバイズと現地調整等で継続的にご指導をいただいている。また、2015年および本研究では、特に2001年にOGYA(Outreach for Grieving Youth Alliance)と呼ばれるnon-profit organizationのKids

Hurt Too Hawai'iのProgram Director, Hiro Ito (MSW)氏に、日本とハワイ州での現地調整や通訳、ご助言等も頂き、University of Hawaii at ManoaのTomoko Iwai 講師にはご助言等も頂いた。その他、多くのホノルルの支援者の方々や、インタビューにも快くお答え頂いた皆様に、心より厚く感謝致します。

【注】

- (1) ここではLGB/Tを性的マイノリティと記述しているが、これはLesbian, Gay, Bisexual, and Transgender の頭文字を取った表記が、一般的に性的少数者として知られているためである。性的少数者はLGB/Tか、については議論の余地がある。例えば、QueerのQをつけたLGBTQ、Intersexual のIをつけたLGBTIQ、複数形のsをつけたLGBTsなどがある。中でも、1980年代頃のBacklashを機に、90年代以降はジェンダー・セクシュアリティの構築や脱構築により、性的少数者の連帯を目指したクィア理論が、Judith P. Butler “Gender Trouble”などを皮切りに発展している。特にLGBは性的指向(Sexual Orientation)の問題、Tは性自認(Gender Identity)の問題とされた場合があり、近年はSOGI「Sexual Orientation and Gender Identity (性指向と性のアイデンティティ)」とする概念も存在する。例：「大阪府立大学SOGI(Sexual Orientation and Gender Identity)の多様性と学生生活に関わるガイドライン」URL：https://www.osakafu-u.ac.jp/osakafu-content/uploads/sites/428/guideline\_sogi.pdf,(2018.1.11DL)
- (2) ヘイトクライムとは、社会的マイノリティに対する偏見や憎悪からなる暴行などの犯罪行為を指す。1992年のロス暴動、98年のワイオミング大学の事件、ポートランドの事件などがあげられる。特に、2016年6月12日フロリダ州オーランドのナイトクラブでは50人以上が死亡し、100人を超える死傷者が出た銃乱射事件は、米国の犯罪史上最悪の事件であった。容疑者は日頃から同性愛者を嫌悪する発言をしており、ナイトクラブは同性愛者が多数集う場所であったため、ヘイトクライムの可能性が指摘されている。'An act of terror and an act of hate': The aftermath of America's worst mass shooting', Los Angeles Time,

June 13, 2016. <http://www.latimes.com/nation/nationnow/la-na-orlando-nightclub-shooting-20160612-snap-story.html>

- (3) 本データはギャラップ社が実施した2015年から2016年の調査結果であるが、40万件以上のインタビュー調査に基づくデータである。In US, More Adults Identifying as LGB/T, *Gallup*, January 11, 2017. <http://news.gallup.com/poll/201731/lgbt-identification-rises.aspx> ギャラップ社の調査は2012年から州レベルでLGB/T Americans Report を実施しており、米国でも信頼性が高い。これらの調査結果は米国でLGB/T個人の社会的受け入れが増加し続けていることを示しているが、当時の社会背景としてバラク・オバマ大統領の存在は大きい。2012年に初めての現職大統領として同性婚支持を表明し、2015年は当時17歳のトランスジェンダーの女性が、親からconversion therapy(転向療法)を強要されて自殺した事件について、性的指向にかかわらず安全に生きる権利を与えられなければならないとして、転向療法中止の声明を出すなどした。また、これらの動向を受け、連邦最高裁判所は法の下での平等を根拠として、すべての州に同性結婚を認める判決を出すなどした。当時のオバマ大統領は「アメリカにとっての勝利」と宣言するなどの社会背景は、LGB/T当事者が社会から受け入れられつつある土壌が培われていた。こうした社会背景は、性自認についてカミングアウトしやすい状況があったといえよう。これらの背景が今後の調査結果に影響を与えるかもしれない。Obama Calls Supreme Court Ruling on Gay Marriage a 'Victory for America'. *Wall Street Journal*. June 26, 2015. <https://www.wsj.com/articles/obama-calls-supreme-court-ruling-on-gay-marriage-a-victory-for-america-143533572>. しかし、現トランプ大統領は「自認する性に応じたトイレの使用」を認めないことや、トランスジェンダーの児童・生徒への学校による差別を禁じる保護政策を撤回すると発表している。Trump Administration Rescinds Protections For Transgender Students, *HuffPost*, Feb 22, 2017. [http://www.huffingtonpost.com/entry/donald-trump-transgender\\_us\\_58ac4fe8e4b0a855d1d9d278?ncid=inbInkushpimg00000009](http://www.huffingtonpost.com/entry/donald-trump-transgender_us_58ac4fe8e4b0a855d1d9d278?ncid=inbInkushpimg00000009)

- (4) Gallup-Healthways Well-Being Index survey 2014は、全米で18歳以上の成人のうち、2,964人のLGB/T当事者と8万1,134人のLGB/Tではない人について電話による調査を実施している。
- 2015年度はKids Hurt Too Hawaiiにおいて、現地で米国ハワイ版の2週間の研修を受講し、Grief Care facilitator のライセンス取得も同時に行った。また、帰国後は仙台での日本版グリーフケア・ファシリテーター資格の取得も同時に行った。
- (5) インタビューについては、本研究のフィールドの基盤を整えていることが強みといえる。研究代表者は、米国ハワイ州での研究調査を2005年8月26日から継続的に実施しており、ほぼ1年に1回ハワイ州に滞在(1年に10日~14日間)で、スーパーバイザーやホストファミリー、現地のNPO機関と連絡をとり、日本においてもメールやインターネット電話などを通じて、常に現地の人との関係を構築し続けている。また、インタビューやその家族、友達なども連絡をとり、信頼関係を崩さず、構築してきたことから、調査の基盤が十分整っている。単に、インタビュー調査のときだけの関係ではなく、各家庭にも訪問したり、特に通訳者はフォストファミリーになるなど、よい関係構築を行った上で実施している。多文化社会のハワイ州では、特にこのような信頼関係づくりが最も重要である。なお、調査対象者はスノウボウル・サンプリングにより、初回インタビューのインタビューが殆どであるが、過去にインタビュー調査を実施したインタビューも1名含まれているが質問回答内容は異なる。インタビューが回答しやすいように、自宅で子どもがいる場所や知人などが同席してインタビューを実施している上、自由に内容を語ってもらう調査法のため、収入要件については回答が得られなかった。なお、LGB/Tカップルなどは、ストレートとして実子を持つ場合も有り得るが、多くは実子を持つことと同じように、言うまでもなく養子縁組は普通のこととして受け止め、希望している。
- (6) バックアップを含めて、ICレコーダーは2台で録音し、会話を聞きながらフィールドノーツも記入した。インタビュー終了後は、フィールドノーツの作成を実施した。
- (7) これまでの筆者の研究では、一般的に裕福な家庭で養子縁組を行うことはとりわけ珍しいことではない。特に、米国で「スポンサー」という考え方は普及しており、一定水準の収入のある家庭や富める者が社会奉仕することが有り得る。
- (8) 米国でもハワイ州は他州と比較して、特に小さいコミュニティで生活している。主に7つの島と小さい島の幾つかの諸島に分かれており、所謂、コミュニティによって(例えば、ハワイアンが住む地域とか、チャイナタウンとか、ダウндаウンなど)、どのような人種やクラスの人がその地域に住んでいるか、わかりやすい。従って、他のこれ以上の情報を明かすと特定される恐れが高く、個人情報保護の観点から、開示できる情報が限られた。
- (9) Male to Femaleの略。
- (10) DMSなどの政府機関などへのこれまでの多くのインタビューでも、親族里親については正確な調査が得られないときいている。しかし、米国の歴史には日本のような児童養護施設はなく、第一義的には、祖父母などの親族による扶養が求められており、特に高齢の祖父母が心理的に困難を抱えた子どもの子育てにあたることの負担は大きく、社会問題にもなっている。ハワイ州はとくに米国の中でも最も他民族な地域である。人種のるつぼであり、ハワイ・ルネッサンスにも代表されるようにオハナ(=家族)文化を大切にしている。したがって、子どもは、コミュニティが有するという文化が確立しているからである。詳しくは、拙稿「児童虐待問題の解決過程とホォ・オポノポノー米国ハワイ州におけるカルチュラル・コンピテンス」第20号奈良女子大学社会学論集、PP137-158。

【参考文献】

Gates J. G. LGBT Americans Report Lower Well-Being, *Gallup's polling methodology*, August 25, 2014.

Spradley P J, 2016, *The Ethnographic Interview*, Waveland Press Inc.

Boss, P., 2006, *Loss, Trauma, And Resilience: Therapeutic Work With Ambiguous Loss*, New York: W. W. Norton & Company. ( =

2015, 中島聡美, 石井千賀子訳『あいまいな喪失とトラウマからの回復: 家族とコミュニティのレジリエンス』誠信書房.)

Boss, P., 1999, *Ambiguous Loss: Learning to Live with Unsolved Grief*, Cambridge: Harvard University Press. (=2005, 南山浩二訳『「さよなら」のない別れ 別れのない「さよなら」—あいまいな喪失』学文社.)

Lofland, J., Lofland H. L. 1994, *Analyzing Social Setting A guide to Qualitative Observation and*

*Analysis*. (=1997, 進藤雄三, 宝月誠『社会状況の分析—質的観察と分析の方法』恒星社厚生閣)

上野善子, 2014「里親制度とパーマネンシー・プランを考える～米国ハワイ州の聞き取り調査より～」口頭発表,第20回子ども虐待防止世界会議(JaSPCAN, ISPCAN), 名古屋, 2014.

上野善子, 2017「米国のLGBTとアダプション」谷口洋平, 綾部六郎他『セクシュアリティと法』法律文化社, 118-120.